

グラント解剖学図譜 第8版

Anne M. R. Agur, Arthur F. Dalley・原著
坂井建雄・監訳

小林 靖, 小林直人, 市村浩一郎, 西井清雅・訳

評者

荒川高光

(神戸大学大学院准教授・
リハビリテーション科学・解剖学)

A4 変型・896 頁
2022 年 7 月
定価：16,500 円
(本体 15,000 円＋税)
ISBN978-4-260-04730-2
医学書院 刊



解剖学を学ぶための書籍には、教科書的な書籍とともに図譜の書籍(いわゆるアトラス, 実物写真などを含む)が存在する。解剖学をしっかり学びたい人にとっては、1冊で全てを網羅してほしいというのが本音であろうが、人体のしくみを1冊に収めるとなるとその書籍のボリュームは手に取れる常識的なサイズではなくなってしまう(古くなるが、第38版の“Gray's Anatomy”のボリュームを見てほしい)。

解剖学の図譜には手書きのイラストが多く、写真だけで構成されているものは少ない。写真で伝える解剖学的情報は説得力が大であることは言うまでもない。しかし、実物標本の写真化には、標本の作製に関する倫理的問題があるほか、三次元で存在する実体を写真にする際に、どうしても見せられない部分が出てくる。手書きの図譜は、読者の理解を助けるために写真に写らないところを表したり、着色したり、許される範囲でデフォルメすることが可能である。その反面、手書きの図譜で問題となるのは「実物との違い」である。

本書『グラント解剖学図譜 第8版』には標本写真もある。頭蓋骨の写真群は美麗であり、理解を助けるものであろう。しかし、大半は歴史を感じさせる手書きの図譜である。「古い図であれば書き換えたほうがいいのではないか」と思うかもしれない。しかし、この手書きの図譜は、実物から作成したものであるだけでなく、もともとなった標本が同じ状態で現存しているため、実物との差異を実際に確かめることができるものなのである。その歴史的意義は非常に重いと思う。

評者である私は、10年ほど前に著者の1人である Anne M. R. Agur 教授のもとに渡り、研究指導を仰いだ。University of Toronto で過ごしていたある日、私は研究室の一角に存在する「J. C.B. Grant Museum of Anatomy」の存在に気付いた。地下の研究室群の一角の部屋にある Museum には、本書の図譜と全く同じ状態で丁寧に剖出された実物標本が、図譜とともに展示されていた。University of Toronto の学生たちはその Museum で自習したり、友達と会話をしたり、グループディスカッションをしたりするのである。他にも貴重な写真や標本が、Museum の中だけでなく廊下にも展示されていた。

身体の内部構造は、写真さえ撮って見せれば理解できると思うかもしれない。しかし、何の準備も予備知識もなく写真を見ても、「森を見て木を探せ」と言われているような状態になる(動脈や神経などは特に)。これが、世界中に解剖学の図譜が存在する理由である。本書の図譜には、そのもともとなった実物標本が現存し、図譜が描かれて以来70年以上、標本と図譜が共存しているのである(本書中のいかにも歴史がありそうな手書きの図譜がそれにあたる)。

日本で、University of Toronto と同様の展示を行うことは難しい。日本で解剖学を学ぶ多くの人々は、人体の実物をすぐに観察できる環境にはない。だからこそ、歴史ある図譜を備えた本書は、実物から離れず、さらに理解しやすいという意味においても、大変よい学習の友となるだろう。